

いのち

木村隆一

かみさんが、病み上がりのわたしを手放しに一人歩きをさせなかつた頃のことである。「風がふく／あきかぜがふく／朽ち葉をおどらせ／まつかさをとばし／すすきはらを／ひたにふきぬけ／山すそのきしべ／月見草を震わせ／まちかたの屋根をこして／風がふく／あきかぜがふく」

と、かみさんの得意げに口ずさむ田代晃二の詩を、小耳に挟みながら昼下がりに山裾の道歩いてきたときのことである。

落ち葉が道一面に散らばる桜並木の道は、わが家の近くにある。昼日中でも人の往来は滅多にないので、かみさんの暗踊を聞くのに都合がよかった。おまけに、わたしの散歩にも打って付けの道である。

道半ばまで来たとき、冷たい風がヒューと吹いて、瞬時に風が身体を通り過ぎた。身震いする間なしに初めよりも強い風が吹いた。

するとどうだろう。それまで道一面に散らばっていた落ち葉たちが、息を吹き返したと

見間違えるほど見事に、ひょいと起立した。

風に煽られ命を得た一本足の集団は、カツカツカツ、タッタッタツと、一斉に地面を小躍りする様を見せながら駆けて来た。

身を反らして葉っぱとの体当たりを避けて、後を振り返ったとき、道の脇に重なり合つて身じろぎもしない、落ち葉が目に残まった。

葉っぱは、枝から離れた途端に生から死へと姿を変える。風の力を借りてひととき命を得た落ち葉が、ありつただけの力を振り絞つて別れのあいさつを交わしに来てくれたように、わたしの目には映った。

わたしの場合は危篤に陥つた病床で、兄弟を病床に集めながらも、どこまでも諦めない家族がいた。

「植物人間でもいいです。生かしてください」と、祈り続けた妻の愛があった。

神への信頼を祈り通してやまなかつたかみさんの信仰が、わたしのいのちを救った。